

新収蔵資料から新島襄書簡について

布 施 智 子

二〇一四年に、同志社社史資料センター（以下、センターと略す）にて、寄贈・購入により、新たに蒐集した資料のうち、新島襄に関する資料は六点であった。これらは全て新島直筆の書簡である。そのうち二通は、『新島襄全集』（以下、『全集』と略す）には収載されていない新出資料である。本稿では、それぞれの資料について、書簡の翻刻とともに簡単に紹介していきたい。

（一）松倉恂宛書簡

【封筒無し】

【本紙】

（前半欠）

可申候間何卒地所之所ハ

新収蔵資料から新島襄書簡について

老兄ニテ御工風被下度

奉仰候右匆卒之間貴答迄

如此候也頓首

六月十六日 新島襄

松倉恂殿

御序ニ令公初其外諸彦へ

宜しく御致声之程奉仰候

且山家方ニハ御丁寧之御世話ニ

相成候間老兄ヨリ御一統へ

宜しく御傳言之程奉希候

小生義只今身ハ京師ニ

アルモ志ハ兎角仙臺ニ馳セ此一身ヲ

折半シ得サルニハ大困却

老兄幸ニ生之志ヲ御遥察

御一笑アリ賜へ

本書簡は前半部が欠損しており、断簡となっている。残存部分の内容は、土地について工風してくれるよう頼み、次いで追伸で、令公（宮城県令・松平正直）をはじめ皆さんに宜しく伝えてほしい。山家（豊三郎）方にはお世話になったので皆さんへ宜しく伝言をしてほしいと頼んでいる。そして、身体は京都にあるもの、志は仙台に馳せており、身体を半分に分けられないのは大いに困る、この志を思いやり、一笑いただきたいと、仙台に思いを向けている様子が書かれている。つまり仙台での学校開設につき、学校用地の依頼と協力に対する礼であり、この内容からして、新島が宮城英学校（後の東華学校）開設に向けて活動していた一八八六（明治十九）年の書簡であると断定できる。

本書簡の受取人である松倉恂（一八二七～一九〇四）は、幕末期には陸奥仙台藩の兵器奉行、軍艦奉行を務めた。戊辰戦争時に藩論を奥羽越列藩同盟結成に向けてまとめるのに尽力したが、会津城陥落で藩論は一変し、松倉は閉門に処せられ脱藩した。その後一八七八（明治十一）年に郡区町村編制法により発足した仙台区の初代区長となる。区長在任期間は六年であった⁽¹⁾。

松倉は、東北への伝道拡張策の一環として、仙台に学校設立を目指した新島の仙台における賛同者の一人である。松倉を新島に引き合わせたのは、新島の強力な支援者、富田鉄之助であった。旧仙台藩士の富田は、二度の渡米経験を持ち、ニューヨーク総領事、英国代理公使を経て帰国。大蔵大書記官として日本銀行の設立にたずさわり、一八八八（明治二十一年）、第二代日本銀行総裁に就任、その後、貴族院議員、東京府知事を歴任した⁽²⁾。この富田と松倉が、のちに開設する宮城英学校の発起人総代となるのである。

富田と新島は、渡米時期が重なっていることもあってか、旧知の仲であった。仙台での学校開設を計画する以前にも、新島は富田に、外国人教師雇い入れについての交渉や、大学設立募金への協力も依頼していた。一

方の松倉と新島の繋がりには、一八八六年一月十三日付の新島宛富田書簡からうかがえる。この書簡で富田は、学校用地を準備し、建築費として二千円募集することを伝えるとともに、賛同者の一人である松倉が上京している。新島にも上京するように新島に要請。新島はそれに応じて二十日から上京し、富田を訪問、仙台の学校開設について相談を重ねた。この上京時に、新島と松倉が面会したのか定かではないが、二十一日に新島が富田を訪問したその翌日、富田が松倉を招き、新島の学校開設の計画について相談し、おおよそ話しがまとまったという⁽³⁾。その後、帰仙した松倉は、仙台の有志の賛成を取り付ける。また、松倉は、同じく仙台にキリスト教主義の英学校開設を希望していた押川方義とW・E・ホーイ(William Edwin Hoy)ら一致教会派の動きを注視し、その情報は富田を通じて新島へと伝えられていた⁽⁴⁾。

新島は、五月十七日から再度上京し、富田宅に入っている。この頃の動向を記した新島の日記「出遊記」には、十六日と十九日の項に「仙台清水小路九番地 松倉恂」との記載がある。両日とも、新島は東京で仙台の協力者と会っているが、松倉とは顔を合わせていない⁽⁵⁾。また、二十三日に富田が英学校設立依頼書を松倉に送っていることから、松倉は仙台にいたのだろう。その後、会津若松、米沢、福島を経て、二十九日に仙台入りした新島は、松倉に到着を知らせ、三十日にいよいよ対面する。松倉は、新島の投宿先に来訪したのち、新島を清水小路の清奇園に案内するが、六月三日に仙台を発つまでここが新島の宿となった。清奇園とは、旧伊達藩士の山家豊三郎の別邸である。仙台での四日間、新島は松倉の案内で、支援者との会合のほか、松平正直県令の自宅訪問、学校設立予定地の視察を行い、この滞りで学校設立への具体的な前進を見たと言える。そしてこの間の新島の滞在を世話したのが、松倉なのである。このような松倉と新島の関係を踏まえ、改めて本書簡を讀み返すと、地所についての依頼、県令らへのお礼、山家方で世話になったことなど、この仙台での滞在を整

えた松倉に対する礼状であることが分かる。

その後も富田を中心に、仙台での学校開設に向けての準備は進められていく。八月十四日付の富田からの書簡と同二十一日付の松倉からの書簡では、予定していた学校用地は価格引き上げのために断念した代わりに、清水小路九番地の松倉の居住地と隣地を譲り受けた五千坪を用意し、建築に着手したことを知らせている⁽⁶⁾。そして、九月初めには富田、松倉両名の名で、英学校開設申請書が松平県知事に提出され、いよいよ十月十一日に「宮城英学校」として開校したのである（翌年「東華学校」と改称し、六月十七日に開校式を挙行）。同校開設にあたっては、富田の果たした役割が大きいことは言うまでもないが、東京に居住していた富田とともに、当地仙台での実質的な協力をしたうちの一人として松倉の存在も決して無視できない。

学校開設のための実働期となった一八八六年に、富田と新島の間で交わされた書簡は、富田からの来信が二十三通と多く残っている。松倉書簡は、松倉からの来信が一通残るのみで、いずれも新島からの発信はこれまでに確認されていなかった。今回蒐集した本書簡は、新島が宮城英学校開設の在仙協力者である松倉に宛てた書簡で、英学校開設の実質的な協力依頼を新島が自らの筆で認めているのが、初めて確認されたものとして貴重である。前半部が大幅な欠損となっているのが惜しい限りである。

(二) 北垣国道宛書簡

【封筒】

(表)

北垣京都府知事殿 侍史

(裏)

新島襄

【本紙】

拝啓本日者參上仕

兼甚遺憾ニ奉存候

を御心ニ掛け被下見

事なる花数枝御

惠贈ニ預リ感謝

ニ堪へす不取敢御

禮如此御座候敬白

五月四日 新島襄

北垣知事殿

京都府知事であった北垣国道宛の書簡で、年次不明であるが、封筒に記載された肩書きから北垣が知事在任中ということ、一八八一（明治十四）年以降に送られたのであろう⁷⁾。『全集』には収載されていない新出資料である。北垣宛新島書簡は、昨年を引き続いでの新出資料の蒐集となる。

内容は、北垣のもとに会いに行くことができなかった新島に、北垣から花が贈られ、それに対する礼状である。感謝の念が簡単に述べられているだけで、背景はよく分からない。新島がこの手紙を認めた五月四日、二人は会う予定であったが、何らかの理由で新島は会いに行くことができなかった。二人の居住地の京都で会う予定であったと仮定すると、北垣が府知事に就任する一八八一年以降の五月四日で、新島が京都にいたのは一八八一年、八二（明治十五）年、八六年、八七（明治二十）年、八九（明治二十二）年の五年のみである。そのうち、一八八七年は四月中旬から新島は病気で、外出の予定をほとんどキャンセルしている。筆が取れるようになるのは五月上旬になってからで、余程の大病であったことが推測できる⁸⁾。現に、これだけ筆忠実な新島であるが、四月十四日から五月九日までの発信書簡は、これまでに確認されていない。これらの状況に鑑みると、一つの仮説として、一八八七年が考えられるのではないだろうか。

北垣が、同志社に対して理解のある人物であったことは昨年の資料紹介でも触れた通りであるが、新島の大衆設立運動を側面から支援した他、自らの子弟を同志社で学ばせるなど、個人的関係も築いていた。新島と北垣との間でやり取りされた書簡は、北垣から新島に発信された書簡が六通、新島から北垣に発信された書簡は本書簡を含めて三十一通確認されたこととなる。また、両者の間には、書簡だけのやり取りだけではなく、常日頃から往来があったことが北垣の日記にも度々記録されている。本書簡は、短い礼状ではあるが、両者の交流だけでなく、不参の新島に花を贈ったという北垣の新島に対する心遣いをよく示していると言える。

(三) 伴直之助宛書簡四通

①【封筒】

(表)

出雲丁壺番地

伴直之助様

(裏)

新島襄

貴答

【本紙】

貴書一通正二

落掌仕候御

懇切之程

鳴謝之至ニ不堪候

明朝ハ御待可

申候勿々貴答

三月七日 新島襄

伴直之助様

②【封筒】

(表)

東京々橋区出雲町壱番地

伴直之助様

(裏)

西京同志社

新島襄

【本紙】

拝啓陳者先般は

折ヨク御同船ヲ得テ縷々

之閑話ヲ得甚大慶ニ奉存候

出京後モ会社條例等ニ

付彼是御配慮被下殊ニ

御大切之御書類御貸被下

奉鳴謝候小生去十二日

之朝横浜ニ出発前

貴館ニ参上之積ニ而

人力車ヲ飛ハセ参候処

豈凶ラン皇大皇后様

御来着ト申ス事ニテ人力往

来止ヲ受ケ歩行シテ

参上スルモ時間ナク不得止事

ステーションニ参リ御書類ハ

横浜迄持参出航前

和田彦方ニ依頼候処

東京ニ序有之儘ニ御届

可申よし被申候間其意ニ任セ

相托し置候間定て御落掌

之事ト奉存候其前日ニも

参上御返却可仕筈之処

其ノ日ハ全ク奔走ニ送り
時機ヲ失ヒ出発之日モ前陳
之次第二而參上拝眉ヲ
不果遺憾此事ニ候
何卒御海涵被下度奉仰候
小生モ十二日正午開帆十三日
正午迄ハ風波荒ラク甚困
却仕候着船モ大ニ後クレ
昨朝六時半着神仕候
右不取敢安着之御報
旁貴兄之御好意ヲ
鳴謝仕度如此也
匆々頓首

三月十五日 新島襄

伴直之助兄

前日ハ木本君ニ御同伴被下

奉謝候敝校之為募金之

事ハ何卒御含置キ被下

時機ニ投シ御尽力之程

奉仰候御序ニ木本君ニ

宜しく

③【封筒】

(表)

東京々橋区出雲丁

壱番地

伴直之助様

(裏)

京都寺町通

丸太丁

新島襄

【本紙】

先夜は御来訪被下

難有奉謝候其節

御依頼申上候件ニ付直ニ

御通知被下是亦難有奉鳴謝候

小生も何レ出京可仕候間

其節ハ渡辺君ニハ

是非面会之上御依頼

可仕候間何卒貴兄ヨリハ

同君之インテレストヲ御繋キ

置被下度奉切望候先は

御禮旁為貴答

匆々頓首

七月廿日 新島襄

伴直之助様

梧下

尚々田口君ニハ宜しく御致声

被下度奉希候又渡辺君へも

御序ニ宜しく奉願候

④ 【封筒】

(表)

京橋区出雲丁壱番地

伴直之助殿

(裏)

成瀬方ニ而

新島襄

十月廿六日夜認ム

【本紙】

昨夜は態々御光来

被下候処宿之者共

小生迄通しも致さず

御断申上候由甚不

都合之至御海容

可被下候小生も何レ近々

御尋可申上候心得ニ

罷在候右得貴意度

勿々拜具

十月廿六日 新島襄

伴直之助殿

尚々小生事昨夜ハ按摩

療法致し居候処より御断

申上候旨宿之者申訊仕居候

新島襄から伴直之助へ宛てた書簡四通である。四通とも、『全集』に収載されている。

伴直之助（生没年不詳）は、『全集』三巻の注解で触れられているが、履歴の詳細は明らかではないと断った

うえで、一八八六年一月に福音舎から発行された『太平新聞』の編集を担当したこと、一八八七年の新島の東上に同行したこと、民友社発行の『国民之友』第四八号の付録「書目十種」で当時の知識人と並んで、専門の経済の文献等を掲げていること、東京市会議員時代の一八九〇（明治二十三）年には巖本善治、古荘三郎らと廃娼演説を行ったことが紹介されている⁽⁹⁾。さらに、伴の足跡を追ってみると、明治期を代表する経済学者であり実業家でもあった田口卯吉の従弟として、田口の事業に多く関わっていたことが分かった⁽¹⁰⁾。伴は、田口が主筆を務めた『東京経済雑誌』（一八七九年一月創刊）の編集に、東京経済雑誌社の社員として関わっていた。この雑誌は、国内初の経済雑誌として知られる。また、田口が実業家として関わった事業にも伴は役員として関わり、両毛鉄道会社では支配人（一八八七年五月）、小田原馬車鉄道会社では取締役（一八八八年九月）として名を連ねている⁽¹¹⁾。その後、一八八九年五月に設置された東京市会の第一回市会議員選挙に深川区から立候補し、当選。一八九四（明治二十七）年三月に辞職するまで、東京市会議員を務めた⁽¹²⁾。市会議員辞職後、第四回衆議院議員総選挙に立候補し、東京府第五区で当選。同選挙では同八区から田口も当選している⁽¹³⁾。

このような経歴を持つ伴であるが、新島との関係は今一つ明らかではない。今回蒐集した四通の書簡の年代は、それぞれ①年次不明、②一八八七年、③一八八九年（封筒消印から）、④一八八九年（封筒消印から）である。

まず、①書簡（三月七日付）の内容は、「貴書一通を受領しました、明朝お待ちいたします」という簡単な連絡事項にとどまる。「明朝」の伴との約束が、東京にてであれば、新島が三月七日時点で東京にいた一八八七年の書簡となる。

①書簡が一八八七年と仮定すると、②書簡（一八八七年三月十五日付）は①書簡が書かれた東京滞在の後に、新島が京都へ帰って伴へ差し出したものとなる。内容は、以下の通りである。折よく同船でき、様々な話ので

きて喜んでゐる。会社条例などにつき、配慮をしてもらい、大切な書類まで貸していただき感謝。十二日朝、横浜へ出発する前、貴館に参上するつもりで、人力車で飛んで行ったものの、因らずも皇太后様がご到着のため、人力車が差し止めとなり、歩いて行つたが、時間がなく、書類は横浜まで持参し、和田彦方にあとで届けてくれるように依頼したので、今頃ご落筆のことと思う。小生は昨朝ようやく横浜から京都へ到着した。という旨の長文の書簡である。新島のこの度の東上の目的は、(一)同志社を官立校と同等と認められる手段(二)京都府下での医学校設置に関して文部省に談判(三)銃器を廉価にて払い下げの手續きが主であつた¹⁴⁾。その道中、神戸から横浜へ向かう薩摩丸で、伴と同船したと日記に記している¹⁵⁾。伴に配慮してもらつたという「会社条例」は、前記の東上目的の(一)(二)に関わるのか、それともこの頃新島が奔走していた仙台での英学校開設に関わるのかは定かでないが、それに関わる書類を伴から借用し、直接返却できずに、横浜の和田彦(宿)に託したという経緯を示している。

次に、③書簡(一八八九年七月二十日付)の内容は以下の通りである。先日の夜は来訪下さり、感謝。その節に依頼した件につき、直に通知下さり、これまたありがたく感じている。小生もいざれ出京するのでその節は渡辺君に是非面会した上で依頼申し上げる。何卒、貴兄より同君(渡辺君)のインテレストを繋いでほしい。(以下追伸)なお、田口君によりしく伝言いただきたい。渡辺君にもよりしく伝えていただきたい。

「渡辺君」とは、明治時代の政治家、渡辺洪基のことを指す。当時、渡辺は帝国大学初代総長を務めていた。本書簡は、新島が亡くなる前年に書かれており、大学設立運動で新島が奔走していた時期である。また、これに対応する伴からの来簡が、新島遺品庫に残されている¹⁶⁾。七月十八日付で、依頼されていた大学の設立について渡辺に話したところ以前に断つたとのことだが、せっかく始めた事業を捨て置くのは残念なので、貴意を伺

いたい。愚見としては、金のかからない小規模の学校とすることなどの談話をした。渡辺は新島が真面目に話しをすれば必ず助けるはずだ。田口とも話したが、周旋方として局に当たる事は辞退したいが、応分の尽力はするとのこと述べている。③書簡は、この来簡に対する返信である。伴が新島を訪ねた「先日の夜」がいつであるかは定かではないが、その際に新島は渡辺への大学設立についての協力要請を伴に依頼したものである。渡辺からは即座に積極的な協力を取り付けることはできなかったが、渡辺自身の考えもあり、新島の話しを聞く意志もあるなど、関心を持つてゐることは確かである。それを捉えて、新島は③書簡において、渡辺の「インテレスト」を繋いでくれるよう、伴に再度の依頼をしたのである。また、来簡では、大学設立運動に対する伴の立場は「尚早論者」と明確に書かれているのが興味深い。しかし、出来かかったものは成立するまで尽力したいとの意見もあり、伴も全面的な賛同ではなかったものの、渡辺や田口といった有力者への橋渡し役となつて、運動に協力したことがうかがえる。

最後に④書簡（一八八九年十月二十六日付）について紹介したい。内容は以下の通りである。昨夜はわざわざご光来下されたところ、宿の者が小生に通さずにお断りし、迷惑をかけたことをご海容いただきたい。小生も近々、訪ねたいと考えている。（以下追伸）昨夜は按摩療養の最中であつたためお断りしたと、宿の者が弁解している。

本書簡は、十月二十五日夜、伴が東京滞在中の新島を来訪するものの、宿の不手際で会えなかつたことを詫びるものである。伴は、後日二十九日になつて、新島を再訪。その際、伴が新島に書簡を送つてゐる¹⁷⁾。新島との話しを受けて、伴が田口と相談し、紹介書を数通差し出すことになつたと報告している。新島は、十月十二日、病軀をおして大学設立募金運動のために東上し、東京、横浜、前橋と精力的に動き、協力を求めて回つた。し

かし、前橋での滞在中に、腹部の激痛をおぼえ、募金運動を中断せざるを得なかった。そして、療養のため年末に神奈川県大磯へ移ったものの、翌一月二十三日に永眠。この東京滞在中、最後の東上となったのである。この滞在中、新島は松方正義蔵相をはじめとする有力者に面会し、あるいは書簡を出して、募金への協力や賛同者の紹介を依頼して回った。伴とのやり取りもその一環で、伴を介して渡辺や田口に協力を求めていたのである。伴自身は、決して有名とは言えないが、幅広い経歴を持つ彼を足掛かりの一つとして、政界や実業界に、大学設立の計画や募金協力への支持を挙げようとしていたことが分かる。伴書簡は、晩年の新島が東京地方で繰り広げた、地道な活動を傍証する資料である。

注

- (1) 宮崎十三八他編『幕末維新人名事典』新人物往来社、一九九四年。上田正昭他監修『日本人名大辞典』講談社、二〇〇四年参照。
- (2) 宮崎、前掲書、六七頁参照。
- (3) 吉野俊彦『忘れられた元日銀総裁―富田鐵之助傳―』東洋経済新報社、一九七四年、二五〇頁参照。
- (4) 同前、二五一頁参照。
- (5) 『同志社百年史』によれば、十九日の会合に松倉もいたとあるが、富田の日記（吉野、前掲書、二五二頁）と新島の記録を照合したところ、松倉は出席していない。
- (6) 『全集』三卷、二六六―二六七頁。
- (7) 北垣の在任期間は、一八八一（明治十四）年一月から一八九二（明治二十五）年七月までである。
- (8) 『全集』八卷、四〇三頁。

- (9) 『全集』三卷、八五八頁参照。
- (10) 岡田有功「第一次企業勃興期における田口卯吉の〈起業者活動〉」『九州共立大学経済学部紀要』第一二三号、二〇二二年二月、十七頁参照。
- (11) 同前、十七頁、二十頁参照。
- (12) 東京市会事務局編『東京市会史』第一卷、東京市会事務局、一九三二年、一三三、三四四、五五五頁参照。
- (13) 衆議院事務局編『第一回乃至第十九回総選挙衆議院議員略歴』衆議院事務局、一九三六年、三七頁参照。
- (14) 『全集』三卷、四五五頁参照。
- (15) 『全集』五卷、三九九頁参照。なお、森有礼一行、石井某も同船した。
- (16) 新島遺品庫 下一三一八。
- (17) 新島遺品庫 下一四三八。

《参考文献》

- ・塵海研究会編『北垣国道日記「塵海」、思文閣出版、二〇一〇年。
- ・新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』全十卷、同朋舎出版、一九八三〜八七年。
- ・岡田有功「第一次企業勃興期における田口卯吉の〈起業者活動〉」『九州共立大学経済学部紀要』第一二三号、二〇二二年二月。
- ・櫻井良樹「制限選挙期における東京市会議員総選挙の結果について」『麗沢大学論叢』第九号、一九九八年。
- ・衆議院事務局編『第一回乃至第十九回総選挙衆議院議員略歴』衆議院事務局、一九三六年。
- ・東京市会事務局編『東京市会史』第一卷、東京市会事務局、一九三二年。
- ・吉野俊彦『忘れられた元日銀総裁―富田鐵之助傳―』東洋経済新報社、一九七四年。

なお、本稿に掲載した書簡の翻刻にあたっては、露口卓也同志社大学名誉教授のご指導とご助言を得た。ここに記して感謝申し上げます。